魚と水　Uo to Mizu (50-2) :1-3, 2013

第45回日ロ研究交流に参加して

小出　展久

日ロ研究交流事業は20年以上も継続され、今年で45回目を迎えます。これまで、毎年、それぞれの研究機関を訪問して研究交流を継続してきましたが、2012年からは年1回の交流となり、交互に両国で開催されるようになりました。さけます内水試からは2010年に中島美由紀さんが第41回研究交流として、2011年には永田場長が第43回研究交流団長としてサハリンを訪問しています。

今回の研究交流は平成25年7月26日から29日までユジノサハリンスクのサフニロ（サハリン漁業海洋学研究所）で開催されました。研究交流には小職の他に、釧路水試の美坂正主査、中央水試の山口浩志主任が派遣されました。26日、13時10分、新千歳空港発ユジノサハリンスク空港行き、サハリン航空HZ152便で千歳空港を発ちました。乗客の半数程度は日本人のようでした。離陸はアナウンスもないまま10分程度遅れています。なにか、ゆったりしています。

飛行時間は1時間余ですが、時差が2時間あります。日本時間での到着は14時30分ですが、既に16時30分をまわっていました。出発の千歳は北海道の6月の爽やかな気候でしたが、ユジノサハリンスクも同様の気候でした。風が少し冷たい気もしましたが、気のせいかもしれません。空港には「SakhNIRO」と書いた紙を持って、秘書のエルザ・イヴシナさんが迎えにきていました。通訳はアレックさん。ゆったりとした口調でなかなか達者な日本語を話します。車で宿泊先のガガーリンホテルまで送ってもらいました。

ユーリイ・ガガーリンは1961年、ボストーク1号で世界初の有人宇宙飛行を成功させた旧ソビエト連邦の宇宙飛行士ですが、ガガーリンホテルというからには何か縁があるのかと思っていたら、特に何もないようで、英雄なのでそのような名前にしたとのことでした。ホテルの近くの公園には我々を歓迎するように両手を広げたガガーリン像がありました。

ガガーリンホテル近くの公園にある、両手を広げたガガーリン像

歓迎して下さったサフニロの3名の研究者

ホテルで少し休憩を取った後、近くのウズベキスタン料理のレストランで有志による歓迎会を開いて頂きました。参加してくれたのはアナトリー・ベリカーノフ水産生物資源部長、アレキサンダー・ゾロトブ科学副部長、クルチェンコ研究員。初めてのウズベキスタン料理にテンションが上がり、ピッチを上げすぎて、最後の料理を完食できなかったのが心残りです。

2時間の時差は歓迎会が終わってホテルに帰るときも明るく、まだまだ、行けそうでした。通訳のアレックさんに飲水などの買い物に、近くのスーパーに寄ってもらいました。間宮林蔵ビールなるものがあり、驚きました。

焼かれたパンの中に入って出てきました本場のボルシチ

「研究交流、がんばるぞ！」とホテルの部屋で乾杯

ホテルに帰って、明日からの研究交流に向けて３人の固い絆を確認するため、ホテルの部屋で乾杯！

翌日は研究交流の本番です。サフニロの会議室で行われましたが、こぢんまりとした会議室にはゆったりとした椅子と大きな液晶ディスプレーが設置してありました。机の上には今回の交流のために作ったと思われるメモ帳がおいてあり、サフニロ側の心遣いが感じられました。ブスロブ所長の歓迎の挨拶、小職の返礼の後、研究者の発表に移りました。

１日目

1.タタール海峡におけるホッコクアカエビの資源量変化の生物学的適応（ブキン　S.D.）

2. 北海道におけるホッコクアカエビの資源管理（山口浩志）

サフニロ側が今回の交流のためにわざわざ作ったと思われるメモ帳。各々の机の上に置いてありました

3. 甲長コホート解析によるケガニの資源管理（美坂正）

昼食

4. 北海道内水面漁業と養殖業（小出展久）

5. サハリン西部海域におけるカレイ類の状況（スミルノヴ　A.V.）

6. ツナイチャ湖の魚類構造（メツレンコヴ　A.V.）

以上で、１日目の研究交流が終了しました。

終了後、歓迎会が開催され、「黒猫」というレストランに案内されました。昨日は出なかったのですが、ロシアといえばウォッカ、冷凍庫でキンキンに冷やして表面に霜の付いたような瓶が出てきました。少しビールで慣らした後、ショットグラスで乾杯です。冷やしたせいか、なにかしらスーッと喉を落ちていきます。通訳のアレックさんによると、乾杯は３杯目までで、その後は自由ですからと言ってくれたものの、結局、乾杯は７杯に上り、ウォッカの瓶も２本目に入ってしまいました。ロシアのレストランは音楽を鳴らしてダンスをして楽しむ、少し

２本目に入ったウォッカと勧め上手のエレーナ女

歓迎会の後の記念撮影

うるさいくらいとは前回、訪問した場長の感想ですが、今回は、普通のレストランはうるさくて話もできないからと、個室をとってくれたようでした。

あれだけ飲んだのに、次の朝は、意外にも３名とも元気でした。

２日目はサフニロ側から２題の研究発表がありました。

7. 南サハリンの沿岸水域における低次生物生産条件（ボロニッチ　V.）

（「沿岸生態系における生態系の下位栄養段階の研究」というプログラムに関して）

8. 南西サハリンにおけるコンブの生態学的研究結果（ガラニン　D.）

（「北海道とサハリンにおけるコンブの比較研究」というプログラムに関して）

各研究員の研究発表が終了してから、次年度の研究交流についての意見交換がなされました。次年度は余市町開催、研究交流開催時期は平成26年６月から７月頃として、詳細はメール等で詰めることとしました。また、プランクトンなどを含めた海洋環境についての情報交換、自然産卵するカラフトマス、サケ等の資源の調整方法、日本のコンブ資源の生物学的情報と資源変遷などについて、次回の話題としたい旨サフニロ側から要望がありました。

交流会が終了して昼食までの時間が空いたので、サフニロの中を案内してもらいました。水質分析装置や魚病研究室には種々の分析機器があり、海洋学研究所だけあって、水中カメラなど多くの機器も開発中のようでした。各研究員の執務机の回りは緑の鉢植えが至るところに置かれ、さながら温室のようでした。水槽も至る所で見られ、アメリカゴキブリを飼っている研究員もいたことには驚きました。

午後からは市内観光、郷土史博物館、旧樺太神社跡などを案内してもらいました。この季節の金、土、日曜日は結婚式が多いらしく、市内のあちらこちらで新郎新婦を祝う人たちを見かけました。

一応、メインである研究交流もこの日で終わりました。サハリン最後の晩餐に、近くのレストランに連れて行ってもらい、ビールと肉料理に舌鼓を打ち、ウォッカを飲み干し、交流を深めました。いい感じに酔っ払ってホテルに帰り、帰国の準備をしてベッドに入りました。ホテルでは結婚パーティでしょうかリズミックな音楽が階下から聞こえ、新郎新婦をお祝いしているようでした。このお祝い、なんと朝の５時くらいまで続き、ほとんど眠れずに翌朝を迎えることになりました。

少々、寝不足になったものの、皆、初めてのロシアを十分に堪能した様子でした。最終日はユジノサハリンスクが見渡せるスキー場やショッピングに連れて行ってもらい、３泊４日の研究交流が終了しました。

これまでの研究交流は日本とロシアという国との交流からサフニロと道総研という研究機関の交流へ、そして、

研究者同士というように交流が深まっています。今後は研究者同士の深い繋がりが再び、両国の繋がりへと進展していくような気がします。交流の回数は年１回へと減りましたが、若手（少ないですが）の研究者の方は是非、研究交流に参加して、研究者同士の繋がりを深めてほしいと思います。

（内水面資源部　こいでのぶひさ）

研究交流終了後の記念撮影、サフニロの正面玄関前で。左からゾロトヴ、ヴァシレツ、美坂、小出、ベリカノフ、山口、ラトコヴスカヤ、ガラニン（敬称略）。